

鬼神童女

作・民富田智明

東京工芸大学芸術学部映像学科

映像表現研究室 課題作品(2007年)

登場人物

鬼頭凜子(10)頭に角が生えた謎の少女。

一人称は「わし」。

年齢は外見推測。

柏原銀次郎(23)関東荒磯波一家の掛け出

しの若者。

矢野純子(30)関東荒磯波一家三代目。

堀兼浅太郎(42)同若頭。

高倉健一(26)同若衆。銀次郎の兄貴分。

矢野瑠璃子(8)純子の娘。

池部良助(50)町の観光協会会長。

金子信行(40)関東脅征会会長。

黒田猛(29)脅征会構成員、斬り込み隊長。

その他

○タイトル

直球の演歌風の主題歌が流れる。

昔の日本映画風の、泥臭い書き文字に

よる仰々しい題字。

○町の遠景

山から近い田舎町。

太鼓や笛の音がする。

○神社の境内・中央

広場に大きなやぐらが立っている。

上では禪一丁の男達が太鼓を叩き、笛
を吹いている。

やぐらを囲むようにして、女子供が歌
いながら踊っている。

○神社の境内・参道

左右に出店が並んでいる。

人だかりの中を強引に進む、黒田猛

(29)とその舎弟二人。

○神社の境内・参道・焼そば屋の前

黒田、親父の顔を覗きこむ。

黒田「どうよ、調子は？」

親父「へえ、お蔭さんで」

黒田「そうかい。一個くれよ」

親父「あいよ」

親父、作り置きを渡す。

黒田「おう」

黒田、焼そばを受け取ると、その場で

食い始める。

親父「あんさん、お金！」

うろたえる親父。

黒田、勝手に作り置きを二つ分捕り、

舎弟達に渡す。

黒田「美味いぞ。食え！」

舎弟達、食い始める。

苛立つ親父。

親父「おい、お前ら、食うなら金を払え！」

黒田「あ？金なんかねえよ」

親父「ふ、ふざけるな！」

黒田「ふん、ふざけるつてのは、こういうん

だよー」

黒田、大声をあげる。

黒田「皆さーん、この焼そばには虫が入って

いますよー。気を付けて下さいねー」

周囲がどよめく。

親父「ば、馬鹿！やめねえか！」

慌てる親父。

親父「でたらめだ！皆、真に受けちゃいけね

え！」

黒田達、笑い出す。

黒田「じゃあな！」

黒田達は逃げようとする。

銀次郎の声「待ちな！」

裏の方から、「関東荒磯波一家」の羽

織を来た青年、柏原銀次郎(23)が

出てくる。

親父「銀ちゃん！」

黒田、銀次郎を睨む。

黒田「あ？何だてめえ！」

銀次郎「お前、『脅征会』だろ？汚い真似す

るなよ」

黒田「んだと？やんのか！」

銀次郎「ここじゃ、お客さんの迷惑だ。来

て。」

銀次郎、黒田を強引に引っ張っていく。

○神社の境内・参道の奥の林

お祭騒ぎからは外れた、人気のない場所。稲荷神社などの、小さなお社がぼつぼつ点在している。銀次郎、黒田を引っ張ってくる。黒田は引き剥がそうと暴れている。

黒田「は、離しやがれ！くそが！」

銀次郎「うるせえ！」

その後ろから、悪態をつきながら舎弟達がついてくる。適当な場所で、銀次郎は黒田を突き離す。

郎は黒田を突き離す。

そして、双方睨み合う。

銀次郎「荒磯波の庭場で勝手な真似はさせんぞ！」

ぞ！」

黒田「ああ、そうかい。だったらどうすんだよ。」

よ。」

銀次郎「決まったらあ！」

銀次郎、飛びかかろうとする。

そこに、荒磯波の羽織を着た、高倉健

一(26)が飛び込んでくる。健一、

必死に銀次郎を押さえる。

健一「やめろ、銀次郎！」

銀次郎「あ、兄貴！」

健一「カシラに言われてんだろ！脅征会と事

を構えるなつて」

銀次郎「だ、だつてよう……」

健一「いいから、やめるんだよ！」

銀次郎と健一が揉め合うところに、黒田が煽る。

黒田「何だい。荒磯波は負ける喧嘩はしないのかい。さすが由緒正しき一家のやることは違うねえ」

銀次郎「んだと！」

健一、黒田を睨む。

健一「おい、売られた喧嘩だ。買うぞ！」

銀次郎「よっしゃ！」

銀次郎と健一、黒田に飛びかかつていく。
く。

黒田「やつちまええ！」

黒田達も飛びかかる。

二人対三人の、擦った揉んだの大乱闘。

銀次郎と健一が頭数で負けている。

乱闘中、銀次郎に殴られた拍子にすつ転んだ黒田が頭に来て、懐からドスを抜く。

黒田「くそが……ぶつ殺してやる！」

その時。

凜の声「下手な喧嘩はやめるんじゃ！」

黒田「だ、誰でい！」

黒田が周囲を見回す。声の主はどこにも見えない。

一瞬で喧嘩が中断する。

凜の声「まったく、人が気持ち良く寝ていたのに……」

黒田「誰だか知らんが、出てきやがれ！」

凜「どこを見ている。わしはここじゃ！」

木の太い枝の上に、頭に角が生えた紅

い装束の少女、鬼頭凜子(外見10)

が立っている。

銀次郎、健一、黒田とその舎弟が、一

斉に木の上を見て唾然とする。

黒田「そ、そんなところに！」

凜「とう！」

凜、木から颯爽と飛び降りる。

銀次郎「あんな高いところから……」

健一「すげえ……」

凜、スタツと着地するなり、

凜「清く正しく美しく！ 俠気の心を角に秘め、

深き山より現れし正義の味方、鬼神童女只

今参上！」

ずばばつと極めポーズ。

凜、小声でボソツと、

凜「わし、かつこいいい！」

勝手に悦に浸る。

黒田「……んだ、この餓鬼い！」

黒田、沈黙を破り、凜にドスを突こう

とする。

凜は黒田の腕を掴み、捻る。

黒田「く、くそが！ 離せ！」

凜「こういう玩具を振り回すと怪我のもと

じゃー！」

凜、ドスを奪い取り、遠くに投げる。

飛んでいったドスが、木の幹に突き刺

さる。

そして、凜は黒田を突き飛ばす。

黒田「野郎！」

黒田、凜を睨む。

凜「どうした、相手するぞ」

黒田「大人を舐めんじゃねえ！」

凜に殴りかかる。

凜「ふん、遅いの」

凜は腹部への横蹴り一発で黒田を潰す。

黒田「うぐお……」

うづくまる黒田。

凜「小さいからって、舐めるでないぞ」

銀次郎と健一、そして黒田の舎弟が、

その光景に唾然としている。

銀次郎「す、すげえ……」

凜、黒田達を鋭い眼光で睨む。

凜「おい、若いの。まだやるつもりなら、

『首』の骨一本は覚悟しておけ！」

舎弟達、うろたえて逃げ出す。

黒田、よろめきながら立ち上がる。

黒田「くそお、てめえら憶えてろよ？」

黒田、走っていく。

凜「お礼参りはいつでも上等じゃ！」

凜は啖呵をきり、銀次郎と健一に目を

やる。

凜「お主ら、平気か？」

銀次郎と健一、凜のもとに寄る。

銀次郎「いや、何だか分からないけど助かつ

たよ」

健一「あんた、強いなあ。大の男を横蹴り一

発だぜ？」

凜「わしにかかれば、あんなの赤子の手を捻
るようなもんじゃ」

凜、得意げになる。

銀次郎、凜の風変わりな容姿をまじまじと見ている。

頭に角。尻尾の様に垂れている栗色の長い髪。小柄で華奢な幼姿を包む、袖無しの紅装束。筒状の白い袴から伸びる足は、紺足袋に草鞋履き。色鮮やかな珠の首飾りをかけ、背中に黒鞘の刀。

凜「お主、どうしたのじゃ？」

凜がきよとんとして銀次郎を見る。

銀次郎「この角って……」

銀次郎、凜の角に触れようとする。

凜「あ……」

凜は咄嗟に角を手で覆う。

凜「わ、わしの角に気安く触るでない！」

凜のつんつんした顔。

銀次郎「あ、ごめん。作り物にしてはよく出てくるなつて」

凜「無礼な、何を言うか。わしの角は本物

じゃー！」

銀次郎「うそ？」

凜「お主、何を疑っておる？信じぬなら触れるがいい」

銀次郎「いいの?」

銀次郎、凧の角を触る。前髪に指を絡め、根元の方まで……。

凧「ん……」

凧、ピクツとする。

銀次郎「は、生えてる……」

健一も凧の角を触りだす。

健一「ほんとだ……」

凧、両方の角を触られ、頬が赤くなつてくる。

凧「い、いつまで触っておるのじゃ!」

凧、二人の手を跳ね除ける。

銀次郎「ごめん。好奇心で、つい」

健一「許しておくんなさい」

銀次郎と健一、慌てて頭を下げる。

凧「ところで、お主ら、誰じゃ?」

銀次郎「あ、これは失礼」

銀次郎と健一、中腰になる。

銀次郎「出先、略式の仁義で失礼さんにござんす。手前、この町で的屋の真似事をさせて頂いております、関東荒磯波一家の若い者でござんす。姓を柏原、名は銀次郎。以後、お見知り置き下さいます、宜しくお

頼ん申します」

健一「続きまして、略式の仁義失礼さんにご
ざんす。手前、右の柏原銀次郎の兄貴筋の
者でござんす。姓を高倉、名は健一。以後、
お見知り置き下さいますて、宜しくお頼ん
申します」

凜、ぼかんとしている。

凜「な、何じゃ、その堅苦しい挨拶は？」

銀次郎「ああ、家業のしきたりつてやつで。

で、君は？」

凜「わしか？そりゃ、清く正しく……」

銀次郎が勝手に続く。

銀次郎「美しく、俠気の心を角に秘め、深き

山より現れし正義の味方、鬼神童女只今参

上、だろ？」

凜「おお、一度で覚えたか！お主、気に入っ

たぞ！」

凜、満面の笑みで、銀次郎の手を握り

出す。銀次郎も笑顔で応える。

銀次郎「それはよかった。で、名前は？」

凜、きよとんとする。

凜「名前などない。わしはわしじゃ！」

銀次郎「言い張られても……」

凜「そうじゃの……仮に、鬼頭凜子とでも名乗っておくかの」

銀次郎「きとうりんこ？」

凜「鬼の頭の凜々しい子じゃ！そのものズバ

リじゃろ？」

銀次郎「自分で凜々しいとか言うか？」

凜「駄目かの？」

銀次郎「いや、ご自由にどうぞ」

凜、銀次郎の肩に手を置く。

凜「決まりじゃな！凜と呼んでおくれ！」

○関東荒磯波一家の前の通り

堂々とした構えの日本家屋。

「関東荒磯波一家」と大きな木札が掛かっている。

羽織を着た若い衆が、箒で外を掃いている。

○荒磯波一家・居間

畳敷きの和室。中央に卓袱台があり、上にお茶と菓子の類がある。そこに、

和服姿に羽織を着た矢野純子(30)と娘の瑠璃子(7)が座しており、向

かつて池部良助(50)が座している。

部屋の隅に控える様に、堀兼浅太郎

(42)が座している。

池部「三代目のお力添えで、今年の祭も大成
功ですわ。有難う御座います」

池部、深々とお辞儀する。

純子「祭あつての荒磯波一家。こちらこそ協
会長さんには随分お力添えして頂き、有難
う御座います」

純子、お辞儀する。

池部「池部でいいよ。それにしても、純子さ
ん、荒磯波三代目も大分板に付いてきたね。

その羽織姿、かっこいいよ」

純子「あら、そうですか？」

池部「ああ。しかし、早いもんだね。ほんの

ちよつと前までは、瑠璃子ちゃんくらいの

女の子だったのが、こうも立派におなりな

すつて」

純子「いえ、私なんてまだまだ。父に比べた

ら……」

純子、仏壇の遺影を見る。池部、遺影
を見ながら。

池部「確かに、先代は立派なお人だった。だ

が、そのうち純子さんがお父さんを追い抜く日が来ると思うよ」

純子「もう、池部さん、お上手ですね」

池部「いやいや、私は本当にそう思ってるよ」

純子「そうですか？有難う御座います」

純子、微笑してお辞儀する。

池部「それじゃ、純子さん……いや、三代目、

これにて失礼させて頂きます」

純子「これからも荒磯波一家を宜しくお願い

致します」

部屋にいる全員、お辞儀をする。

池部、瑠璃子に目をやる。

池部「そうだ、瑠璃子ちゃん。おじさんと一

緒にお祭行こうか」

瑠璃子「え？いいの？」

純子「いいんですか？お邪魔じゃないでしょ

うか？」

池部「お気になさらず。三代目だつて、昔は

私が何度も連れ出したんですから」

純子「では、池部さん、娘を宜しくお願いし

ます」

純子、軽くお辞儀をする。

池部「お任せ下さい」

池部、立ち上がる。

池部「じゃ、行こうか」

瑠璃子「うん」

○荒磯波一家・玄関先

池部と瑠璃子が玄関に来て、下足になる。純子と浅太郎が見送りに立つ。

純子「あ、瑠璃子」

瑠璃子「ん？」

純子、財布を取り出す。

純子「お駄賃よ。持って行きなさい」

瑠璃子にくらか渡す。

瑠璃子「ありがとう」

池部「では、これにて失礼」

池部、軽く会釈して帽子をかぶり、瑠

璃子と家を出て行く。

純子と浅太郎、お辞儀をする。

○荒磯波一家の前の通り

池部と瑠璃子、右側の方に出て行く。

池部「瑠璃子ちゃん、お化け屋敷行こうか」

瑠璃子「えー、怖いのだよお」

入れ違いで、左側の方から、目付きの

悪い連中がやってくる。関東脅征会会

長、金子信行(50)と、大袈裟な包

帯を巻いた黒田とその舎弟二人、それ
に数人の手下達。

金子は池部と瑠璃子の姿をチラッと見
ながら、玄関先へと入っていく。

○荒磯波一家・玄関先

純子と浅太郎、玄関にいる。

脅征会の面々が、玄関先に押し寄せる。

金子「どうも、矢野さん」

浅太郎「あんた、脅征会の！」

純子「金子の、うちに何のご用で？」

金子「いやね、大したことじゃあねえんです
が……。うちの若い者が、あんたのどこの

掛け出しに怪我させられたんですよ」

金子、黒田達の包帯姿を見せつける。

黒田「この落とし前、どうしてくれるんだい」

黒田、その舎弟、純子を睨む。

純子「若い者の不始末は私の不始末。この通
り、重々お詫び致します」

純子、正座して頭を下げる。浅太郎も

それに倣う。

黒田「おい、謝って済むくらいなら医者是要
らねえんだよ！俺らのこの怪我、どうして
くれんたい！」

黒田が怒鳴る。

金子「まあまあ、落ち着けよ」

金子、黒田を抑えると、凶々しく玄関
に座りこむ。

金子「矢野さん、ここはひとつ、大人の解決
をしましょうよ」

純子「お金ですか？そちらの方々の治療費で
この場を収めて頂けるならば、喜んでお支
払い致します」

純子、金子を見据える。

金子「いや、別に強請りに来たわけじゃない
んですよ。お金なんてどうでもいい事です」

純子「では、いかがすれば宜しいので？」

金子、にやける。

金子「あなた方の庭場を、我々、関東脅征会
に譲渡して頂きたい」

浅太郎「て、てめえ！」

浅太郎、血がのぼって立ち上がろうと
する。

純子「カシラ、待ちなすつて」

純子は浅太郎を抑える。

純子「金子の、我々の屋は露天商です。堅気のお客さんがたこ焼き買って来て、射的で遊んでくれて、それで私達はご飯を食べさせて頂いているのです。的屋にとって、

庭場はまさに命同然。それを渡せと要求することは、お金なんかよりもよっぽど重大な事……」

純子、おもむろに羽織を脱ぎ、正座から片膝をついた状態になる。そして、

右手を袖の中に入れ……、

純子「この関東荒磯波一家三代目、矢野純子、先代から受け継いだこの庭場、渡せと言われて渡す御人好しではありませんよ！」

ビシッと啖呵をきり、バツと右肩を脱

いで緋牡丹の刺青を見せる。

純子、眼光鋭く脅征会の面々を睨む。

黒田「女の癖に粋がつてんじゃねえぞ！こちとら彫物見せられて尻尾を巻く玉じゃねえんだよー！」

手下達、逆上して悪態をつき始める。

金子「黙つときな」

金子が手下を抑える。

金子「ねえ矢野さん。私はね、欲しい物は必ず手に入れないと気が済まない性質なんですよ」

金子、立ち上がる。

金子「一日待ちます。もしそちらが庭場を譲渡しないのであれば、我々にもそれなりの意地つてものがありますので……では」

脅征会の面々、立ち去っていく。脅征会が去った後、荒磯波若衆の一人が、

玄関に塩を撒き始める。

純子と浅太郎、立ち上がる。純子、衣服を正し、羽織を着る。

浅太郎「姐さん、こりゃあ脅征会の宣戦布告でございませ〜」

純子「うん。だけど、庭場を渡すわけにはいかないよ」

浅太郎「……要求を断ったら、奴ら、仕掛けてきますよ」

○荒磯波本家付近の道

脅征会の面々が、歩いている。

黒田「親分、このまま引き下がるなんてねえいすよ」

金子「馬鹿、今日中に仕掛けるぞ」

黒田「えっさつき一日待つって……」

金子「奴らを油断させる為よ」

黒田「で、どう仕掛けるんで？」

金子「さつき、本家から出てきたのは、協会長の池部と三代目の娘だ。祭りに行ったに違

えねえ……」

黒田「親分、それはつまり……」

金子「娘をさらえ！」

○荒磯波一家・玄関先

銀次郎と健一が玄関先に入ってくる。

凜、後ろについている。

銀次郎「ただいま」

浅太郎「馬鹿野郎！脅征会とは事を構えるな

って、いつも言ってるだろうが！」

浅太郎、怒鳴りながら玄関に出てくる。

銀次郎「カシラ、だ、だってよ……」

浅太郎「うるせえ！言い訳は聞かねえ！まっ

たく、余計な火種作りやがって」

純子、玄関に出てくる。

純子「まあまあ、そんな怒鳴りなさんな」

浅太郎「だって、姐さん」

純子「過ぎた事に文句つけても始まらないよ」

純子、凜に気付く。

純子「その子は？」

健一「へえ。脅征会との喧嘩を割って入って
収めてくれたんで」

純子、凜をまじまじと見る。

純子「この子が？瑠璃子より少し大きいから
いじゃないか」

銀次郎「見かけによらず、つてやつですね」

銀次郎と健一、脇による。

健一「どうぞ」

凜、前に出て頭を下げる。

凜「ご当家、軒下の仁義に失礼ですがお控え
なすつて」

純子と浅太郎、顔を見合わせる。

純子、片膝をつく。浅太郎、前に出て

中腰になる。

浅太郎「有難うござんす。軒下の仁義に失礼
さんでござんすが、手前、控えさせて頂き
ます」

凜、中腰になって右手を前に出す。浅

太郎も右手を前に出す。

凜「早速ながら、ご当家三尺三寸借り受けま
して、手前、仁義を發します」

浅太郎「手前、一家の若い者です。どうぞお控えなすつて下さい」

凜「手前、旅中の者です。是非ともお兄さんの方からお控えなすつて下さい」

浅太郎「有難うござんす。再三のお言葉、逆意とは心得ますが、手前、これにて控えさせせて頂きます」

凜「早速のお控え有難うござんす。手前、粗忽者ゆえ、仁義前後間違えましたる節は、真つ平ご容赦願います。手前、生国は関東武蔵は秩父より流れ着きました鬼神が娘でござんす。恐れながら、終生名無しの身分ゆえ、姓名の儀、其の場限りの呼称で失礼さんでござんす。姓は鬼頭、名を凜子。昨今掛け出しの若輩者でござんす。以後、万事万端宜しくお願いなんして、ざつくばらんにお願い申します」

浅太郎「有難うござんす。丁寧なるお言葉、遅れまして失礼さんでござんす。手前、当、関東荒磯波一家二代目矢野純子に従います若い者でござんす。姓は堀兼、名を浅太郎。家業、未熟の掛け出し者。以後、万事万端宜しくお頼ん申します」

凜「有難うござんす。どうか、お手をお上げなすつて」

浅太郎「あんさんからお手をお上げなすつて」

凜「それでは私が困ります」

浅太郎「それでは、ご一緒にお手をお上げなすつて」

凜と浅太郎「有難うござんした」

凜と浅太郎、中腰をなおる。

純子、立ち上がり、奥から話かける。

純子「お凜ちゃんだっけ？仁義口上が出来る

とは大したものじゃないか」

凜「さつき銀次郎と健一に教わったんじゃ」

凜がニコツと笑い、脇で銀次郎と健一

が軽く頭を下げる。

純子「その格好、小粋な感じけど、お祭の衣

装？」

凜「何じゃ？それ」

純子「違うのかい？」

脇に控えていた銀次郎が前に出てくる。

銀次郎「姐さん、この子、どうやら本物の鬼

子らしいんですよ」

健一も脇から出る。

健一「この角も、さつき触らせて貰ったんで

すが、頭から直接生えてるんで」

銀次郎「すごかったつすよ。木の上から颯爽

と飛び降りて、極め台詞をしゃべったかと

思ったら、大の男を横蹴り一発で潰しちまっ

たんですから。な？兄貴」

健一「ああ。あの度胸、あの強さ、鬼神の如

きとはあのことですよ」

銀次郎と健一、一人でうなづく。

純子「じゃ、お凜ちゃん、本物の鬼子なの？」

凜「そういうことになるの」

凜、ニコツと笑う。

純子「そうですか。大した事は出来ないけど、あとで娘も帰って来るんで、ゆっくりして

いって下さいな」

凜「娘さんって、いくつじゃ？」

純子「七つよ」

凜「ほう、そりゃ会ってみたいの」

浅太郎「立ち話もなんだ、お客人、とりあえ

ず入りなせえ」

○神社の境内・中央(夕)

祭囃子の音がする。

禪男達が、屋根の上で太鼓を叩き、笛

を吹いている。やぐら周辺には提灯が

ともし、夕闇を照らしている。女子供が踊り、歌っている。

○神社の境内・参道(夕)

数多くの屋台が所狭しと並んでいる。

人は多いが、通行に不自由なほどの混

雑ではない。池部と瑠璃子が、参道の

真ん中辺りを歩いている。

池部は巨大な牛串焼きをかじっている。

瑠璃子は景品のぬいぐるみを片手に抱

いてくる。

池部「日も暮れてきたし、そろそろ帰ろうか」

瑠璃子「うん」

池部と瑠璃子、境内の入り口の方に歩

いていく。

○神社・参道の入り口・大鳥居(夕)

池部と瑠璃子が、鳥居をくぐって参道

から抜ける。そのまま通りに向かう。

○神社の近くの通り(夕)

人通りがない。

池部と瑠璃子が歩いている。

前方の脇道から、黒田率いる目つきの
悪い男達が出てくる。男達、不気味に
笑っている。

瑠璃子「お、おじさん……」

不安を感じ、瑠璃子は池部の裾をつか
む。

池部「なんだ、お前達！」

黒田「どうも協会会長。矢野のお嬢さんをお連
れしに来ました」

瑠璃子、池部の後ろに隠れる。

池部「誰だか知らんが、この子は渡さんぞ！」

黒田「おっさんよ、脅征会舐めちやいけねえ

「よ

手下の男達が懐からドスを抜く。

黒田「抵抗すると為にならねえぜ？」

男達、じりじりと迫る。

池部「に、逃げろ！」

黒田「あ？逃げられねえよ」

池部「逃げろお！」

池部、唐突に叫びながら黒田に向かっ
ていく。黒田、不意に体をつかまれる。

瑠璃子「おじさん！」

驚愕する瑠璃子、何も出来ない。

黒田「く、くそが！」

池部「行け！走れ！」

瑠璃子、一目散に走って逃げていく。

黒田「追え！逃がすな！」

男達、一斉に瑠璃子を追いかける。

黒田、しがみつくと池部を突き飛ばす。

黒田「おっさん、挑む勇氣はいいが、少しは

頭数を考えなよ……」

池部「くそ、瑠璃子！」

池部、走り出そうとする。

黒田、池部を殴り倒す。

地面に突つ伏す池部。

黒田「おっさん、慌てるなよ。もう少し遊ば

うぜ……」

○路地(夕)

瑠璃子、息を荒げて無我夢中で走って

いる。後ろから、目付きの悪い男達が

追いかける。

瑠璃子、段差につまずいて転ぶ。ぬい

ぐるみを落とす。

すぐに起き上がり、泣きながら必死に

逃げる。

瑠璃子、脇道に入る。

○路地・脇道(夕)

瑠璃子が脇道に入ると、先回りしていた目付きの悪い男と鉢合わせする。

男の気味の悪い笑み。

瑠璃子「あ……」

後ろからも男達が追いついて来る。

瑠璃子、男達に強引に縄で縛られ、布袋に入れられる。

○脅征会・外観(早晚)

寂れた場所にぼつんとある、老朽化した二階建て。周囲には廃材や廃車が転がっている。

黒田達が歩いてきて、建物に入っていく。

く。手下達が瑠璃子を入れた布袋を担

ぐりこん。

○脅征会・監禁室

窓がない狭い部屋。

物が乱雑に散らばっている。

扉が開き、瑠璃子入りの布袋を担いだ

男達が入ってくる。

布袋から瑠璃子を引つ張り出し、縄で縛つたまま床に放置する。

男達、部屋を出ていく。入れ替わりに

黒田と金子が入ってくる。

瑠璃子をまじまじと見る。

瑠璃子、恐怖で引き攣っている。

金子「お嬢さん、今晚は。いきなりで失礼だが、今夜はここでお泊り会をして貰うよ。

たった一人だね……」

黒田「まあ、こんな経験は二度とねえ。せい

ぜい楽しみなよ」

二人、笑いながら部屋を出る。

瑠璃子、封じられた口で、何か呻いている。

扉が閉まり、真っ暗になる。

外側から、鍵を掛けられる音がする。

○荒磯波一家・大部屋

凜「イチニの半じゃー！」

銀次郎「くそ、半か！」

畳敷きの上に、銀次郎、健一、凜が座している。

凜が壺とさいころを掲げる。

凜「次、入るぞ」

壺にさいころを入れ、勢いよく床に叩きつける。

銀次郎「丁！」

健一「半！」

凜「勝負！」

凜が壺を上げる。

サイコロの目は五と二。

凜「グニの半じゃ！」

銀次郎「また半かよ！」

健一「運悪いなあ、お前」

銀次郎、そっぽ向く。

銀次郎「もういいよ。丁半なんか子供騙しだ」

健一「おい、フテてんじゃねえよ」

凜「そうじゃ、お主。さいころに負けるなんて、大人げ無いぞ」

銀次郎「うるせえな！どうせ俺はヒヨッコだよ！」

銀次郎、立ち上がる。

健一「おい、逃げるのかよ？」

銀次郎「便所つすよ！」

凜、立ち上がって銀次郎に寄る。

凜「銀次郎、連れションならわしが付き合うぞ?。」

銀次郎「馬鹿、女と連れションが出来るかよ。」

凜「そんなの試してみなきゃわからんじゃろ?。」

銀次郎「試すまでもねえ。大体、この家の便所は二つだ。」

銀次郎、襖を開けて出て行く。

凜、健一の方を向く。

凜「わし、銀次郎に変な事言ったか?。」

健一「変と言うか、不思議な発言をしたぜ?。」

凜「だって、連れションは朋友の証じゃろ?。」

健一、苦笑する。

健一「男同士ならな……まあ、もう一勝負し

ようや。」

凜「望むところじゃ!。」

○荒磯波一家・便所

綺麗に掃除されたTOTOの便座の前

に立ち、銀次郎が小便をしている。

銀次郎「あ、やべえ。的外した……。」

○荒磯波一家・居間

丁半をやっている凜達の声が聞こえて

いる。卓袱台の所に純子と浅太郎が座

している。ふと、浅太郎が話しかける。

浅太郎「姐さん」

純子「ん？」

浅太郎「お凜ちゃんだっけ？不思議な子だけ

ど、あの子がいると、この家も賑やかにな

りますね」

純子「そうだね。瑠璃子はどちらかと言えば

大人しい方だからね」

浅太郎、ふと壁の時計を見る。

浅太郎「お嬢さん、遅くないですか？」

純子「そういえば遅いね。でも、池部さんと

一緒だから、家まで送ってくれると思うん

だけど」

浅太郎「まさか、脅征会の奴らじゃ……」

純子「まさか。あいつらから一日待つって言

いだしたんだから、今日、仕掛けて来るっ

て事はないでしょ？」

浅太郎「姐さん、あいつらは汚え愚連隊だ。

過信しちゃいけない。目的の為なら手段は

選びませんよ？」

○荒磯波一家・玄関口

外から戸を激しく叩く音。

便所から出た銀次郎が、玄関に来る。

銀次郎「はいはい、今出ますつては」

鍵を開け、戸を開くと、血だらけの池

部が倒れこんでくる。

銀次郎「あ、あんた！」

銀次郎、池部を抱き留めると、慌てて

声を張り上げる。

銀次郎「姐さん、カシラ、た、大変だあ！」

浅太郎「どうした！何があった！」

奥から、純子、浅太郎が飛び出てくる。

純子「い、池部さん！」

浅太郎と銀次郎が、池部の体を床に寝

かせる。

凜「何じゃ、何じゃ！」

健一「何の騒ぎですか！」

健一と凜も駆けつけてくる。

純子「池部さん、どうしてこんな……」

池部、血だらけの手で純子の手を握る。

池部「う……ぐ……」

純子「喋らないで！」

池部「すまん……」

純子「え？」

池部「瑠璃子ちゃんが……」

純子「娘が、どうしたのですか！」

池部「ぐ……」

池部、力尽きる。

純子「池部さん、しっかりして！池部さん！」

浅太郎、池部の首に手をあてる。

浅太郎「……亡くなってます」

浅太郎、池部のまぶたを閉じてやる。

純子「そ、そんな……」

純子、放心状態になる。

健一と凜が、池部の傷を凝視する。

健一、青ざめた顔。

健一「こりゃあ、ドスでかなり刺されてまっ

せ……」

凜、池部の血染めの服をバツと剥ぐ。

池部の上半身が露出する。

健一「凜、何を……」

凜「酷いの……。苦しんで死ぬように、わざと

と急所を外して刺しておる……」

銀次郎「わかるのか？」

凜「こりゃあ見えても、わしは鬼神の端くれじゃ。

それなりに殺しの知識は積んでおる……」

浅太郎は、銀次郎と健一に目をやる。

浅太郎「仏を……座敷に運んで差し上げろ」

○荒磯波一家・客間

池部の遺体が布団の上に寝かせてある。

純子と浅太郎が、傍らに座している。

浅太郎「姐さん、これが脅征会のやりかたでっ

せ？始めから奴らあ、絵を描くつもりでい

たんですよ」

純子「私は、その絵図にまんまと踊らされた

訳かい……」

浅太郎「いや、でも……どっち道、庭場を渡

さない限りは、奴らは仕掛けてきたでしょ

うし」

純子「何が荒磯波三代目だよ……。所詮、私

は、先代の遺言で、若い衆から持ち上げら

れて襲名しただけの神輿さ……。本当だっ

たら、年長のカシラが三代目の器だったの

に……」

浅太郎、純子の手を握り、真摯な目で

見つめる。

純子「あ……」

浅太郎「姐さん。いや、純子さん……そんなこと言っちゃいけねえよ。あんたこそが、

正真正銘、荒磯波の三代目だよ。先代、あんたのお父さんが、遺言であんたを二代目に指名した理由を……、若い者が、あんたを三代目に持ち上げた理由を……、あんたは分かつてねえよ。皆があんたを三代目に持ち上げてるのは、度胸でも腕っ節でも何でもねえ。ただ、あんたの普段の優しさと、誠実さに突き動かされているからですよ。皆、矢野純子というお人が好きだけです。俺達の屋はただの露天商だ。お客さんを喜ばすのに、切った張ったは必要ねえんです……」

純子「せ、浅太郎さん……」

純子、浅太郎に抱きつく。

浅太郎「そんな……いけねえよ。こんなことしちゃ。仏さんの前です」

浅太郎、純子を離し、少し目をそらす。

浅太郎「俺は、堀兼浅太郎は、荒磯波三代目矢野純子の右腕として、側にいらればそれで満足なんです。勘弁して下せえ」

純子、一呼吸する。

純子「……御免なさい。取り乱してしまつて」

浅太郎「旧縁の人が殺されたんだ。無理も無

いです……」

純子、池部を見る。

純子「池部さん、今までずっと独り身だつた

の……。それで、私や瑠璃子の事を、家族

のように可愛がつてくれて。小さい頃、よ

く山に遊びに行つたな……」

純子、深々と頭を下げる。

純子「許して貰えるとは思わないけど、御免

なさい……」

浅太郎も倣つて頭を下げる。

浅太郎「お葬式は、この家で行しましょう。

姐さん」

純子「うん」

○荒磯波一家・大部屋

銀次郎、健一、凜が座している。苛立

ちをさいころにぶつけて闇雲に壺を振つ

つくる。

銀次郎「俺のせいだ……こうなつちまったの

は、全部俺のせいだ！あの時、奴らの嫌が

らせに目をつぶつていれば――」

健一「違う、俺のせいだ！喧嘩を止めに行つた俺が、簡単に喧嘩に乗っちゃまったのがいけねえんだ！」

銀次郎「でも……庭場を荒らされて黙っていられる的屋はいねえ！」

健一「くそ……脅征会の奴ら、汚すぎるぜ！どうして協会長が殺されなくちゃならねえんだ！それに、お嬢さんまで……」

凜、おもむろに立ち上がる。

凜「わしのせいじゃ……」

銀次郎「え？」

健一「いや、あんたは……」

銀次郎、健一、凜を見上げる。

凜「わしが、余所者のわしが、身勝手な正義感で、勝手に喧嘩に割り込んでしまったから……」

銀次郎、健一、立ち上がる。

銀次郎「凜、それは違うよ。お前が出なくて、も、既に喧嘩は起きてたんだから……」

健一「そうだ。あんたに何も責任はねえ」

凜「でも、わしが調子に乗って、奴らに『お礼参りは上等だ』なんて啖呵を切ったから、矛先変えて倍返ししおったんじゃ……」

凜、うつむく。

凜「わしが、あの者を殺したんじや。それに娘さんとやらを……」

銀次郎「馬鹿野郎！」

銀次郎、凜を怒鳴る。

銀次郎「めえ、勝手に思い詰めてんじやねえ！」

凜「ぎ、銀次郎？」

銀次郎「凜、お前は悪くねえ！もしあの時、お前が喧嘩を収めてくれてくれなかつたら、俺も兄貴も、脅征会の奴にドスで刺されていたに違えねえ！」

銀次郎、凜の肩をつかむ。

銀次郎「お前は、俺達を救ってくれた命の恩人なんだぜ？何も悪い事はしちやいねえよ」

凜、涙目で銀次郎を見つめる。

凜「銀次郎……済まぬ！」

凜、銀次郎に抱きつき、泣き出す。

凜「わしは……わしはあ！ただ、自分に酔っておつたんじやあ！」

銀次郎「凜……」

銀次郎、凜を抱き留める。

健一、銀次郎を見て苦笑する。

健一「子供相手に熱くなりやがって……」

二人に背を向けて歩き出す。

健一「邪魔者は消えるぜ……」

健一、部屋を出て行く。

○荒磯波一家の前の通り(夜)

健一、こつそりと家から外に出て行く。

手には、白鞆の長ドスが握られている。

夜風に吹かれ、ひたすら歩いていく。

○脅征会の前(夜)

健一がやってくる。

健一、ダボシャツを脱ぎ、上半身を露

出させる。背中 of 唐獅子牡丹が覗く。

健一「俺も馬鹿だよな……」

長ドスの鞆を抜き捨て、建物に入つて

いく。

中から、物音と怒声と絶叫が聞こえて

くる。

○荒磯波一家の前の通り(夜)

金子、黒田、そして大勢の手下達が、

歩いてくる。荒磯波一家に入っていく。

○荒磯波一家・玄関先(夜)

戸を激しく叩く音。

黒田の声「脅征会だ！開けろ！さもないと蹴破るぞ！」

玄関に、純子、浅太郎、銀次郎、凜が

飛び出てくる。

銀次郎「カシラ！」

浅太郎「開けろ」

銀次郎が鍵を開ける。

戸が勢いよく開き、金子が入ってくる。

黒田と手下達は、後ろで控えている。

金子「どうも、今晚は」

浅太郎「てめえ、何しにきやがった」

金子「いやね、お届け物をしに来たんですよ」

金子、黒田に目をやる。

黒田「はい」

黒田、外から大きな布袋を持ってくる。

それを、玄関に置く。

浅太郎「何だこれは？」

金子「見ればわかりますよ」

浅太郎、銀次郎に目をやる。

浅太郎「開けろ！」

銀次郎「へえ」

銀次郎、布袋の紐を解き、中を覗く。

銀次郎「うっ！」

銀次郎、顔面蒼白になる。

浅太郎「な、何だ！」

浅太郎が覗きこむ。

浅太郎「な！」

浅太郎も顔面蒼白。

浅太郎「け、健一……なのか？」

銀次郎と浅太郎、思わず後ずさりをする。

純子「健一がどうしたんだい！」

奥に控えていた純子が動揺する。

銀次郎「酷い……酷すぎるよ」

銀次郎、壁にへたりこむ。

金子「正当防衛つてやつで。こいつがうちに

斬り込んで来たんですから」

黒田「自業自得だぜ？」

凜が銀次郎のもとに寄る。

凜「銀次郎、健一がどうしたのじゃ……」

銀次郎、涙顔で引き攣っている。

銀次郎「あ、兄貴が……バラバラになってる

んだよお……」

凜「え……」

凜、布袋に駆け寄り、覗きこむ。

体が震え、顔が引き攣りだす。

凜「外道め……」

凜は背中の刀に手をのばし、刀身を引き抜く。

凜「斬る……」

凜の眼光が鋭くなり、金子達を睨む。

手に握られた刀から、紅い妖気が出て

不気味に光っている。

その場の全員が、憎悪に包まれた凜の

覇気に圧倒され、啞然としている。

銀次郎「り、凜……」

純子「お凜ちゃん……」

黒田、うろたえながら金子を見る。

黒田「お、親分……な、何か光ってまつせ？」

金子「馬鹿、き、気のせいだ！」

黒田「あ、あの餓鬼ですよ……昼間、この俺に舐めた真似しやがったのは……」

金子「てめえ、餓鬼にやられたのか！」

黒田「あの餓鬼……やたら強い上に、何か変

なんです！」

金子「言われなくても十分変だ！」

凜、金子と黒田にじりじりと寄つていく。

金子と黒田、後ずさりする。

凜「お前ら、生きて帰れると思うな」

刀を前に突き出す。

金子「ま、待て！」

凜「待たん！」

焦る金子。

金子「む、娘がどうなつてもいいのか！」

純子「ぶ、無事なのかい！」

金子「当たり前だ！子供殺しなんて、目覚め

の悪い事はしねえ！」

凜「ほう、ならここでお前らを斬つても娘さ

んは帰つてくるという訳じゃな？」

凜、刀を振り上げる。

金子「待て！俺の身に間違いがあつたら、話

は別だ！その時は娘が行方不明になる手筈

になつてる！娘を助けたいなら、変な気は

起こすんじゃねえ！」

純子、凜に駆け寄り、後ろから引き止

める。

純子「お凜ちゃん、だめ！」

凜「と、止めるでない。こやつらはクズ

じゃ！」

純子、必死に凜を抑える。

金子、凜が身動き取れなくなると態度
が大きくなる。

金子「庭場だ！娘を返して欲しければ、庭場
と交換だ！」

純子「に、庭場は渡せないよ！」

金子「庭場か娘か、夜明けまでに腹を決める
んだ！決めなかったら、こっちから踏み込
む！いいな！」

金子、外に出て行く。

黒田と手下達も、後に続く。

凜「ま、待て！待つんじゃない！」

凜、じたばたする。

○荒磯波一家・居間

凜が卓袱台を思い切り叩く。

卓袱台の前に純子と凜がいる。

凜、頭に血が上っている。

凜「お姐さん、何でわしを止めたんじゃない！」

純子「言ってたろ？奴らに何かあったら娘を

手にかけるって！」

凜「そんなの、その場で奴ら全員斬っていれ

ば、手下に知られることもないじゃろうに！」

純子「斬る斬るってねえ……あんたみたいな小さいのが刀を振り回したところで、あの人数を相手にできるわけがないじゃないか！」

凜「ここのわしの剣を愚弄するか！」

凜、純子に背を向ける。

純子「どこ行くんだい！」

凜「話にならない！わし一人で斬り込んでやる！」

純子「ま、待ちな！」

凜「待たん！」

凜、部屋を飛び出て行く。

純子「馬鹿！」

浅太郎が部屋に入ってくる。

浅太郎「姐さん、健一の……後始末が終わりました」

純子「カシラ、出入りの準備だ……」

浅太郎「斬り込むんですか？」

純子「お凜ちゃん……あの子、馬鹿だよ」

浅太郎「へ？」

純子「一人で斬り込みに向かったよ……。場

所も知らないのに」

浅太郎「一人で？」

純子「他所様なんだから、逃げればいいのに

ね……。ホントに変な子だよ」

○荒磯波一家の前の通り(夜)

眼光を鋭くした凜が足早に歩いている。

凜「つたく、お姐さん、弱腰過ぎじゃ！あん

なんじゃあ、娘さんは助けられん！」

ふと、白鞆の長ドスを持った銀次郎が、

凜の目前に立っている。

凜、銀次郎に気付く。

凜「ぎ、銀次郎？」

凜、立ち止まる。

銀次郎「場所もわからずにどう助けるんだ？」

凜「あ……。それは……」

銀次郎「道案内が必要だと思ってね……。大分

待ったぜ？」

凜「お主……。修羅場じゃぞ？」

銀次郎「兄貴をあんなに惨たらしく殺されて、

黙っていられるかよ……」

凜「やめておけ。お主じゃ返り討ちに遭うの

がオチじゃ！場所だけ教えてくれれば、そ

れで良い！」

銀次郎、声高に。

銀次郎「俺は……お前を一人で行かせたくねえんだ！」

凜、動揺する。

凜「な、何を言っておるか。わしは、一人でも……」

銀次郎「確かに、お前は凄く強い鬼神なのか

もしれない。俺なんかお前の足下にも及ばねえ。けど……」

銀次郎、凜の手を握る。

凜「え？」

銀次郎「俺は、お前が可愛くて仕方がねえ！」

銀次郎、真摯な眼で凜を見据える。

凜「お、愚か者！突然何を……」

凜、顔が赤くなる。

銀次郎「ああ、俺は馬鹿だよ。馬鹿だから本気で言ってるんだ」

凜「お主……」

銀次郎「凜……。俺の妹分になってやって下さい！頼みます！」

銀次郎と凜、互いに見つめあう。

凜、くすつと笑う。

凜「お主……底抜けの馬鹿じゃ」

銀次郎「え？」

凜、歩き出し、銀次郎を通り過ぎる。

銀次郎「お、おい……」

凜「……敵は多い。心して望め！」

凜、銀次郎に振り向く。

凜「頼むぞ、銀兄い！」

銀次郎に笑みを見せる。

銀次郎「あ、ああ！」

凜と銀次郎、並んで歩き出す。

銀次郎「凜、連れションは出来ねえけど、死

戦を切り抜けるのは一緒だぜ？」

凜「銀兄い、本当に馬鹿じゃの。比べる物が

違い過ぎじゃ」

銀次郎「うるせえな」

○とある小道(夜)

凜と銀次郎が、鋭い目つきで歩いている。

銀次郎、白鞘から刀身を抜き、鞘を投

げ捨てる。手に唾を吐きつけ、柄を硬

く握る。

凜、背中に手を伸ばし、黒鞘から抜刀

する。刀身から、紅い妖気が鈍く光る。

二人、ひたすら歩き続ける。

○脅征会・少し離れた場所(夜)

寂れた場所にぼつんとある、老朽化した二階建て。

周囲には廃材や廃車が転がっている。

凜と銀次郎が、横並びで真正面から現れ、立ち止まる。

凜「ここが地獄の一番地か……」

銀次郎「ああ……」

凜「銀兄い、突撃じゃ！」

銀次郎「おう！」

建物に向かっていく。

○脅征会・二階・会長室

壁に神棚があり、両脇に「脅征会」と

書かれた沢山の提灯。神棚の下には、

額縁に入った「○字に脅」の金代紋。

部屋の隅に虎の剥製と甲冑が飾ってある。

金子、部屋の真ん中でゴルフクラブを

振っている。黒田が脇に控えている。

黒田「親分」

金子「なんだ？」

黒田「荒磯波の奴らなんて腰抜けです。何でさつさと仕掛けないんですか？奴らを潰せば、庭場は自動的に俺らの物ですぜ？」

金子「男の拘りつてやつよ」

黒田「は？」

金子「黒田、俺が『脅征会』という代紋を掲げる理由を知ってるか？」

黒田「いえ……」

金子「俺はな、『脅し』に浪漫を感じてるのよ」

黒田「浪漫、ですか？」

金子「ただ奪い取るだけじゃ面白くねえ。結果よりもよ、そこに至るまでの過程が重要なよ。俗に言う、悪党の美学つてやつだ」

金子、大笑いする。黒田、苦笑する。

黒田、ぼそぼそと。

黒田「……馬鹿じゃねえの？」

金子「何か言ったか？」

黒田「いえ……」

その時、一階から物音と怒声と絶叫が上がる。

金子「な、何だ！」

黒田「ま、まさか！」

部屋の中に、手下1が駆け込んでくる。

手下1「き、斬り込みです！」

金子「潰せ！潰すんだ！」

手下1「はい！」

手下1、部屋を出て行く。

黒田「親分、娘を連れて裏口から逃げてくだ

よ〜。」

金子「あ、ああ！」

○脅征会・監禁室

扉が開き、部屋に光が入る。

金子と黒田が入ってくる。

金子「お嬢ちゃん、お引越した。来い！」

瑠璃子は口封じをされながらも呻き声を上げる。

瑠璃子を担ぎ、二人は部屋を出る。

○脅征会・一階・事務所

右腕を切断された手下2が、血を撒き散らしながら絶叫している。

手下2が事務机にぶつかり、物が散らばる。机の上でもがいて、手下2は果

てる。

椅子や机が乱雑に倒れている。灰皿や食器類、書類など、様々な物が床に転がっている。手下達の死体も転がっている。

目付きの悪い男達が七人。全員武器を手をしている。正面出入り口の前に、

凜と銀次郎が、血染めの刀を構えて立っている。

銀次郎「関東荒磯波一家三代目若衆、柏原銀次郎！瑠璃子お嬢さんを返して貰いに来たぜ！」

凜「同一家客分、鬼頭凜子！渡世の義理により貴様等を斬る！」

二人が啖呵を切ると、手下達が殺気立つ。手下1が奥の階段から降りてくる。

手下1「やっちまええ！」

手下3が銀次郎に長ドスで斬りかかる。

銀次郎、手下3を上から斬り下ろす。

顔面から血飛沫が上がり、手下3が窓ガラスに突っ込んでいく。

それと同時に手下4が凜に斬りかかる。

凜は手下4の胴を斬り込む。血染めに

なつて手下4はぶつ倒れる。

凜と銀次郎、左右に別れる。

手下5と手下6が凜に斬りかかる。凜は手下5を突き刺し、机の灰皿を手に取つて手下6に投げ付ける。怯んだ手下6を、すかさず凜は斬り伏せる。手下7が銀次郎に斬りかかつてくる。銀次郎がそれを横に飛び避け、ソファに着地する。すかさず手下8が長ドスを突立てようとする。

凜「銀兄いー！」

凜が咄嗟に手下8に飛び込み、両腕を切断する。長ドスを握ったまま、腕が吹っ飛んでいく。手下8は絶叫して転がり回る。すぐに手下7が死角から凜に斬りかかる。

銀次郎「凜！」

銀次郎がソファから転がるように床に着地し、ドスを拾つて手下7に投げつける。ドスが手下7の胸に突き刺さり、転がるように倒れる。

凜と銀次郎、目を合わせて口元が笑う。

手下1「く、くそ!」

手下1、二階に逃げていく。

凜「逃がさんぞ!」

銀次郎「二階を頼む!俺は地下を!」

凜「よし!気をつけるんじゃぞ!」

凜、階段に向かっていく。

○脅征会・階段

凜が階段を駆け上がる。

手下1「この餓鬼いい!」

手下1がドスを構えて凜に突っ込んで

くる。凜は刀を前に突き出す。手下1

は、そのままの勢いで凜の刀に勝手に

貫通する。

手下1「ぐおっ!」

凜が刀を抜くと、手下1が階段を転げ

ていく。

凜「愚か者め!」

凜は二階に向かう。

○脅征会・地下室

銀次郎、扉を蹴破る。

銀次郎「お嬢さん!」

部屋に入り、周りを見る。

無機質な部屋にルーレット台がある。

銀次郎「非合法カジノか……」

ルーレット台以外は何もない。

銀次郎「凜！」

銀次郎、地下室を出て行く。

○脅征会・二階・廊下

凜に斬られた手下が何人か転がっている。

手下9と手下10が、階段脇で凜と対峙している。

手下9が斬りかかる。凜はそれを斬り伏せる。手下9は勢い余って階段の下

に落ちていく。手下10、腰が引けて

下がりだす。凜は追いかけて手下10

を突き刺す。刀を抜くと、横の扉が開

き、手下11が斬りかかってくる。

凜は手下11に飛びかかり、小部屋に

転がり込む。

○脅征会・二階・小部屋(金子情事用)

狭い畳敷きの和室。布団が敷いてある。

凜と手下11が布団の上でもつれ合う。

取っ組み合いの最中、手下11の手が

不意に凜の平坦な胸に当たる。

凜「わ、わしの胸は、貴様のような者が触れられる程安くはない！」

手下11の手首を、片手の握力だけで

砕き潰す。

凜は刀の柄で手下11の胸部を殴打する。鈍い音がして、呻き声を上げてうずくまる。

凜は立ち上がり、手下11を突き刺す。部屋を出ようとする、手下12が扉の向こうにいる。

銀次郎「おおお！」

横から銀次郎が刺突し、手下12は凜の視界から消える。

窓ガラスが割れる音がし、手下12の

絶叫が聞こえる。数秒後、外から鈍い

落下音が聞こえる。

建物が静かになる。

凜「銀兄い！平気か！」

凜は小部屋を出る。

○脅征会・二階・廊下

凜が廊下に出ると、廊下の端に銀次郎が
いる。

銀次郎「二階から落ちたら痛いだろうぜ？」

銀次郎は凜に寄る。

凜「手下達の気配がなくなったぞ」

銀次郎「……会長室だ。行くぞ！」

二人、会長室へ向かう。

○脅征会・二階・会長室

扉が蹴破られる。

銀次郎「金子！」

凜「覚悟じゃ！」

銀次郎と凜が飛び込む。

部屋の中は無人。

銀次郎「くそ！逃げられたか！」

凜「娘さんは？」

銀次郎「探せ！」

二人、頷き合って部屋を出る。

○脅征会の裏（夜）

金子と黒田が、瑠璃子を連れて逃げて
いる。

純子「待ちな！」

長ドスを持った純子と浅太郎が目の前に立っている。

金子「や、矢野の！」

金子と黒田、立ち止まる。

純子「裏から出てくると思ったよ。瑠璃子を

返して貰うよ！」

黒田「矢野、死ね！」

突然、黒田がドスを投げる。

純子「な！」

浅太郎「危ない！」

浅太郎、純子の盾になって刺される。

浅太郎「うぐあ！」

純子「カシラ！」

浅太郎、純子に寄りかかる。

浅太郎「ね、姐さん……怪我、ないかい？」

浅太郎、倒れる。

黒田「こ、こいつ！」

黒田、もう一本ドスを投げようとする。

銀次郎の声「させるか！」

黒田にドスが飛んできて、胸に突き刺

さる。

黒田「ぐおっ！」

向こうから銀次郎と凧が走ってくる。

黒田「こ、この若造がああ！」

胸から血が滲む黒田が、ドスを銀次郎に投げる。

銀次郎「うぐああ！」

銀次郎にドスが突き刺さる。

凧「ぎ、銀兄い！」

銀次郎、倒れる。

凧「うあああああ！」

凧、俊足で黒田を叩き斬る。

黒田の首が宙を舞う。血の大噴射が起き、黒田の胴体が倒れる。

金子、黒田の血を浴びる。

金子「あああああ……！」

金子、腰が引けて尻餅をつく。

凧と純子がじりじりと迫る。

純子「金子……覚悟！」

純子が長ドスを振り上げる。

金子「うおおおお！」

金子、懐からドスを取り出す。

純子「うわあああ！」

純子が斬ろうとした時、凧が純子の手を止め、代わりに金子を刺す。

凜が刀を抜くと、金子は血を流して倒れる。

純子「お凜……ちゃん？」

凜「お姐さん……お姐さんは、手を汚したら駄目じゃ」

純子「私は……大切な人達を死なせて、娘をさらった（いつが許せなくて）」

凜「お姐さんが人を斬るのを、娘さんが喜ぶと思うか？」

純子の長ドスを、凜がもぎ取る。

凜「娘さんを解いてやるんじゃ」

純子「る、瑠璃子！」

純子、瑠璃子のもとに駆け寄る。すぐ

さま縄を解いて、口封じを剥がす。

純子「瑠璃子、もう大丈夫だよ」

瑠璃子「お、お母さん！」

瑠璃子は純子の胸で泣く。

純子「御免なさい……」

瑠璃子を抱きしめる。

凜「……銀兄いー」

凜、倒れている銀次郎に駆け寄る。

ドスが、胸に深々と刺さっている。白

のダボシャツを、血が真っ赤に染めて

いる。まだ息は残っている。

銀次郎「り、凜……」

凜「な、何じゃ……」

銀次郎「角……触っていいか？」

凜「す、好きなだけ触れ……。だから……死

ぬでないぞ？」

銀次郎、笑みを浮かべる。

銀次郎「角を触れば……生き返るぞ」

銀次郎、凜の角を触る。前髪を指に絡

めて、根元の方まで……。

凜「ん……」

凜の体がぴくつとなり、頬が赤くなる。

銀次郎「お前、ここ、弱いんだろ？」

凜「うん……」

銀次郎「たく……可愛すぎるぜ……」

凜の角から手が離れる。

凜「え？」

銀次郎、力尽きている。

凜「な、何が角を触れば生き返るじゃ……」。

愚か者め……」

凜の体が震え、大粒の涙が流れる。

凜「銀兄iiiiiiii!」

凜はひたすら泣きじゃくる……。

○荒磯波一家の前の通り(朝)

凜、純子、瑠璃子が立っている。

純子「お凜ちゃん……行っちゃうのね？」

凜「うん……」

純子「……また、会えるかな？」

凜「……わからぬ」

凜、お辞儀をして歩き出す。

瑠璃子「お姉ちゃん？」

凜、立ち止まって振り向く。

凜「何じゃ？」

瑠璃子「お姉ちゃんの角って本物？」

凜「……本物じゃ！」

凜、ニコツと笑う。

おもむろに足を半歩開き、深呼吸する。

そして。

凜「清く正しく美しく！快気の心を角に秘め、

深き山より現れし正義の味方、鬼神童女只

今参上！」

ずばばつと極めポーズ。

瑠璃子「お姉ちゃん、かっこいいー！」

凜「有難うな！」

凜の満面の笑顔。

凜「いざ、ちよぼじやー」

凜は荒磯波一家を歩き去っていく。

完